さいたまゴールド・シアター中間発表会 「Pro・cess ～途上～」

団員たちはかく闘い、かく成長せり

5月に、「さいたまゴールド・シアター」としてスタートして3カ月。「公共の劇場として、どんなことをやっているのか公開した方がいい」との、埼玉県芸術文化財団芸術監督である蜷川幸雄の考えにより、「Pro・cess ～途上～」と題した中間発表会が行われた。7月28日から8月1日まで計6回の公演に向け、蜷川を始め、振付やヴォイス指導などの講師陣も総力を挙げ、連日のように熱の入った稽古が行われた。団員たちはいかに闘い、いかに成長したか。発表会の模様と共にリポートする。

写真:幸田森　取材・文:鴨澤章子

本番初日。167席の会場は満員御礼。入場から拍手が沸き起こる中、演技が始まる。水槽の中に全員手足を縮めこませて入る姿は胎児そのもの。赤ちゃんの泣き声が音楽と共に場内を流れる中、やがて胎動し、光へ外へ向けて手は伸ばされ、必死に外に這い出てくる。ゆっくりと四つん這いで歩き始め、よろめきながらも立ち始める。歩き出す。

次第に歩みは速くなり、全力疾走に。そしてまた、動きはゆっくりとなっていき、やがてはまた水槽の中に身を委ねる……。これまでの長い人生を思わせる演出に静まりかえる場内に、最初のセリフが響く。「誰だ。名を名乗れ。答えろ」。『ハムレット』からとったこのセリフ以降、団員たちが次々に立ち上がり、セリフを言う。何作かの脚本からとったセリフも、言う人自身の言葉に聞こえるほど、その人の人生を思わせ、説得力がある。「私、今ではすっかり女優なの」「私みたいに不幸せなことばかり続くとそれが当たり前になって～」……。団員たちは客席にも伝わるほど緊張している。しかし、途中、セリフに詰まったり、間違えたりすることもあったものの、笑いもところどころで起き、団員も観客も集中力は途切れなかった。舞台はやがて、輪唱のような28組による『明日そこに花を挿そうよ』のシーンに。そして最後、全員が一人ずつ自分の名前と年齢を高らかに言う中、感動が広がり舞台は締めくくられた。観客たちの暖かい拍手を受ける団員たち。ここまで来る道のりは決して平坦なものではなかった。

自分たちの人生を重ねていけば、どこにもない何かを発見できる

7月10日　中間発表会のための台本が団員たちに手渡され、セリフが各々に割り振られる。5月に「さいたまゴールド・シアター」がスタートする前から、レッスンを開始して3カ月後を目処に中間発表会をすることは予定されてはいたものの、台本を手にした時に、その実感を団員たちの多くは抱いたに違いない。シェイクスピア、チェーホフ、ランボー、寺山修司などの脚本から蜷川幸雄がセリフを抜き出し、組み合わせたユニークな台本だ。

台本と同時進行で、今までほとんどの授業を受けてきた彩の国さいたま芸術劇場の大稽古場に、セットも組み上がった。アクリルでできた水槽のようなセットが人数分。下にはライトが組み込まれ、暗い中でボーッと浮き上がる様は、空間に浮遊するようで美しい。

「安藤忠雄さんの建築と似ていて、無機質だけれどきれいでしょう。そこに人間が入ると少し人間くさくなる」（蜷川）

7月13日　セットでの初めての稽古で、蜷川による立ち稽古が始まる。実際にセリフを言わせながら、セリフを削ったり、増やしたり、順番を変えたりを繰り返していく。まだ渡されたばかりの台本を暗記するのは、たとえ若い役者でも難しいことに違いない。それを2回目で、もう台本なしでやるという蜷川。

7月28日に行われた、さいたまゴールド・シアター中間発表会『Pro・cess ～途上～』より。左端から団員の田村律子さん、小川喬也さん、渡部純二さん、柴田絃子さん。下は全員が水槽の中に立ち上がるシーン。深いしわが刻まれた顔、少し曲がった腰……それらすべてが掛け値なしに格好いい。年齢を重ねることが素敵に思えた瞬間だ。

「台本を離す勇気も必要なんだよ」

時には「下手くそ」「ちゃんと（セリフの）音を上げろ。音上げるのも勇気なんだよ、いくじなし！」と檄が飛ぶ。蜷川からきつい言葉が飛び出すのも、それだけ熱が入っている証拠だ。しかし、団員たちはセリフを言うだけでもまだ精一杯。感情を表現するように踊るシーンでは、どう身体を動かしたらよいのか、とまどう場面も。

「今まで見たダンスの概念を忘れて、自分たちの人生を重ねていけば、どこにもない何かが発見できるのではないか」

そう励ます蜷川はまたこうも言う。

「みんな、もうちょっと先に行けるはず。（演じることによって）違う自分に出会っていけるのは嬉しいものだよ」

そんなんじゃ、お客さんに500円返さなくちゃいけない

7月21日　本番をほぼ1週間後に控えても、まだまだセリフが出てこなかったり、動きも時に緩慢な団員たちに対し、蜷川は秘策に打って出た。その秘策とは、若い役者2人。後半部分で、今までずっと蜷川のレッスンで取り組んできた、清水邦夫作『明日そこに花を挿そうよ』のチー子と炙のシーンを全員、計27組で繰り返し演じるのだが、そこに若い2人の組を投入したのだ。原田琢磨（23歳）と前川遙子（24歳）。共に蜷川が率いる演劇集団「ニナガワ・スタジオ」の役者であり、ハイティーンであるという設定のチー子と炙に近い年齢の2人の存在は、稽古場に刺激を与えるに十分だった。完璧なセリフ、テンポのいいやりとり、素早い動き……。けれど一方では、年老いた人が演じるチー子と炙の違いがより際立ち、それもまた蜷川のひとつの狙いだ。

「若い人の動きやテンポはなかなか真似できないけど、若かった時のことを感じて、経験したことを生かせば、この脚本を解釈できると思います」（団員の宮田道代さん）

7月25日　衣裳をつけての初めての稽古。衣裳は、「“今の自分”が一番見えやすい服」（蜷川）で、自前のものだ。もう本番は3日後とあって、泰然としていたように見えていた団員たちにも、さすがに焦りの色が見え始める。休憩時間の合間にも、各々セリフの気になる部分を自主的に練習する姿が目に付く。実際のところは、舞台稽古が始まり、